

里中 李生 著 Rishou Satonaka

嫌われる男こそ一流

Forest
2545
Shinsyo

はじめに

あなたは「平凡な男」と言われたら怒るだろうか。

私は非常に平凡な少年だった。

成績は中の上。運動会では二位か三位。クラスの班長にはなれるが生徒会長にはなれない。私を好きだと言う女の子は、学校で一人か二人くらいで、モテモテにはならない。それに満足していたところがある。

そんなのんびりしていた私を襲ったのが、人種差別だった。

転校した中学校が朝鮮人を差別していた。そして、東京から大阪のその学校に転入した私も、「東京の奴」と罵られ、差別された。何しろ教師もそうだったから、差別主義の学校だったと言える。

それまで、学校と道徳を信じていた私の心は破綻はたんしたと言っても過言ではない。

この世に平等などない事を、差別主義の教師が教えてくれた。

しかし、少年だった私はなぜか冷静だった。

本当に軽蔑^{けいべつ}されるべき人間とそうじゃない人間がいる。

平等は幻想。特に男女は違う生きもの。

時代は常に過ちを繰り返している。信じられるのはごく一部の人間だけ。

こう判断し、勉強を始めた。

勉強とは学校の勉強ではなく、世の中の道徳を疑う事だった。黒人差別を扱った映画をよく見たものだ。

それから、私は『天才』に近づいていった。もともと、凡人だったので天才にはなれないが、近づくことはできたものだ。友人から、「言葉の魔術師」と言われ、作家を目指して邁進^{まいしん}した。

あなたはどうか。

男として人と違うことをするなら、常に時代に反抗していないといけないのだが、

「反抗」という言葉のイメージがとても少年っぽくて使えないのが厄介である。尾崎豊あたりのイメージになっている。

だが、行動を起こしてほしい。

今、あなたは平成という時代に縛られて、時代の言う通りに生きている。

育児を習い、妻に給料を全額渡し、浮気はせず、反日マスコミの話を傾聴し、格差社会のせいにして、リストラに怯^{おび}えながら成功も放棄して趣味に生きているだけだ。

それはあなたが嫌われることを恐れ、媚びているからだ。女性か時代に媚びているのだ。

私のような学のない平凡な男が、才能を開花させたのは時代や世の中を疑ったからだ。そして実際に行動したのだ。

例えば、快樂という道徳に反発する言葉に、女たちはヒステリックになる。女だけではなく、男の自称「善い人」も怒りだすだろう。彼女ら、彼らは、趣味と保身のために生きている人間の形をした人形だ。退屈な生きものにすぎない。

私は違う。自由に、生き生きとして街を歩いている生粋の人間。

偽善者にはならない。しかし、殺人者でもなければ暴力主義者でもない。暴力的な男は先天的におかしいのであって、そうじゃないあなたは天才に近づけるのだ。才能開花というわけだ。ただ、何にも媚びないだけで、それが可能になる。本書を読み終えたあなたは、凡人たちに嫌われる一流の男になれるのだ。

里中李生

嫌われる男こそ一流 目次

はじめに——3

第1章 女を「嫌う」と美女を引き寄せる

「難しい女が疲れる」と感じたら一流——14

誰もはつきりと言いたがらない男と女の決定的違い——20

女に嫌われないと美人は獲得できない——27

女のコンプレックスとセックス——31

「愛し合うセックス」という幻想に縛られるな——35

女を養うという男の生き方——40

成功する男が選ぶ女とは——47

第2章

いますぐ「大衆」から抜け出せ！

大衆が好むものを疑え——52

大衆志向の映画に騙されるな——58

実力のある男を認めることができない二流——65

上から目線をやめないか——70

ブームを疑わない男は二流——76

「幸せ主義」にアンチを唱える——81

第3章

お金に嫌われない一流の「考え方」

お金はこう使うんだ——92

お金は神様と思え——97

お金は貯めるものではなく、使うもの——102

三流の男の快樂主義とは——107

全身ユニクロでは一流になれない——111

若いうちの趣味は害悪でしかない——118

第4章

「我慢」して得られる成功などない

- 一流の仕事をこなす天才の条件——126
- 仕事中毒になって引退する——131
- やりたい仕事以外はするな——136
- 三〇歳で夢を捨てよ——144
- あなたは今の仕事を語れるか——149
- ニートに発言する権利はない——154
- 「忍耐が美德」という社畜な生き方を捨てる——161

第5章

一度きりの人生、快樂的に生きてみないか

- 友達は贅肉だ——168
- 経験のないことは語るな——173
- 悩んだら女を抱け——178
- 正義は勝てない。だから快樂を求めろ——183
- 成功は「笑い」とともにある——188
- 私はなぜ、こんな本を書くのか——193

フォーマットデザイン panix (中西啓一)
カバーデザイン 清水良洋 (Malpu Design)
本文デザイン 二神さやか
DTP 高橋サトコ